

# 平安期文献『和名類聚抄』記載郷名の現在比定地を用いた 〈千年村〉抽出方法に関する研究 - 千年村研究その1 -

正会員 ○ 中谷 礼仁<sup>1</sup>  
同 庄子 幸佑<sup>2</sup>  
同 堀井 隆秀<sup>3</sup>  
同 小林 千尋<sup>3</sup>

集落研究 古代 『和名類聚抄』

本報告は〈千年村〉プロジェクトに基軸を置くものである。〈千年村〉プロジェクトとは千年間を基準とした持続する集落地域を〈千年村〉と名づけ、その収集分析と存続のためのアセスメントの開発を目的としている。<sup>1</sup>長い存続の歴史を持ち、様々な圧力を受けつつも、歴史的特性を保持しつづけてきた空間の立地には経済的基盤、生産性や防災性が考慮され、持続的で土地固有のシステムがすでに育まれてきたと考えている。しかし、そのような性格は突出した文化財的評価の対象としてではなく、むしろ健全な日常的国土をささえている。

第1稿では古代地名の現在比定地を用いて、千年前に社会的集団が存在し、それが現在まで存続している可能性のある地域を抽出する手法を報告する。第2稿ではその手法を用いた地域社会評価手法を提案する。第3稿では第1・2稿の手法により抽出した地域の中で、千葉県を対象に実施した調査成果を報告する。

## 1 はじめに

本稿では〈千年村〉を全国から抽出する手法の紹介およびそれらの地域がもつ特性の考察を行なった。

千年前に社会的集団が存在し、それが現在まで存続している可能性のある地域を抽出する手法の開発にあたり、〈古代地名の現在地比定〉に注目した。〈古代地名の現在地比定〉とは、古代地名が現在のどのあたりを指すのかを、地名の類似性や古代・中世・近世に関連する事物の存在から総合的に判断したものである。歴史学・歴史地理学・地域史研究などにおいてすでに相応の蓄積があったが、その具体的な空間上のイメージには乏しかった。<sup>2</sup>

詳細は後述するが(本稿2参照)、古代に地名が存在し、それが国家体制に認識されていたことは、そこで生活と生産を行っていた場とそれに関連する共同体が存在したことと同義である。つまり〈古代地名の現在地比定〉を用いれば、我々が暮らす日本列島のいずこかに、そのような空間を締める共同体が存在したであろう地域を見出すことができると考えた。

## 2 〈千年村〉を古代文献ならびにその先行研究から抽出する方法について

### 2-1 抽出作業に用いる史料

〈古代地名の現在地比定〉は『角川日本地名大辞典』(以下、『角川』)にまとめられている。本手法では『角川』を主たる資料として用いた。

#### □『角川日本地名大辞典』について

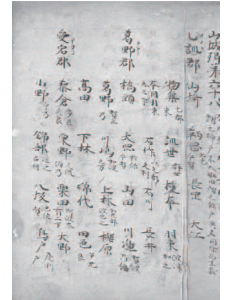
『角川』は1978-90年にかけて刊行された日本全国の地名に関する辞書である。刊行当時の日本全国の地名について、地名の由来と沿革、歴史を紹介している。この中で平安期文献『和名類聚抄』に記載される地名の現在比定地に関する記述が見られる。明治期の歴史地理学者の吉田東伍や郵岡良弼の見解や地誌資料、『延喜式』式内社の存在、

A Study on Millennium-Village with current areas of the place name written in Heian period literature Wamyoruizyusyo  
- Millennium villages research Part 1 -

古代集落跡の発掘成果などを参照し、出版当時における〈古代地名の現在地比定〉の見解がまとめられている。

#### □『和名類聚抄』について

古代地名として『角川』が掲出する『和名類聚抄』について簡単に触れておく。『和名類聚抄』は、931-38年に編纂された類書形式の漢和辞書である。<sup>3</sup>「国郡部」(二十巻本)に律令制下における行政区画(国・郡・郷)が網羅されている。古代地名を日本各地から把握できる最古の史料である。



#### 2-2 抽出対象とその方法の性格

次に私たちが行った抽出方法の性格について説明する。抽出対象は『角川』内の『和名類聚抄』記載の古代郷名である。古代郷は、『続日本紀』(平安初期)によれば、五十戸で一郷とされ、課税のために編制された社会的集団であることが推察される。<sup>4</sup>『和名類聚抄』記載郷名は「九世紀後半の史料を参照したもの」<sup>5</sup>とされる。この時代は班田の授与が間に合わなくなり、律令制の再編の実施(801年)や延喜の荘園整理令・最後の班田授与(902年)などが行われた。これはつまり律令制が崩壊し始める時期と言える。<sup>6</sup>本手法は『和名類聚抄』記載の郷名—古代国家が管理していた地域—を基底に、既往の研究者によって、それと引き当てられた現在地を対象とするものである。つまり本手法は上記古代文献が編纂された10世紀中盤に上記のような空間を締める共同体が存在し、その場所が現在まで存続した可能性のある地域として、既往の比定地を用いたのである。

#### 2-3 〈古代地名の現在地比定〉の比定精度による類型化

それらを全国的に概観すると、その比定精度が異なることが判明した(図2)。まず、現在地に比定できるもの/できないものに大別され、また比定可能な地名においてもその精度に階層があった。また地域ごとにおいても母数の差がある。しかしながら相応の分布傾向を見ることは可能であろう。『和名類聚抄』の郷名を用いた〈古代地名の現在地比定〉に関して7類型に分類することとした(表1)。

比定可	①単一の大字に比定
	②複数の大字に比定
	③市域に比定
	④河川流部など③より広域な範囲に比定
比定不可	⑤比定に関する説が異なる
	⑥比定地は未詳とされる
	⑦比定に関する記述がない

#### 2-4 千年村の抽出

そこで、上記7類型のうち、1と2—大字領域に比定できるものについて地図上への可視化を行った。大字とは、

NAKATANI Norihito, SHOJI Kosuke,  
HORII Takahide, KOBAYASHI Chihiro

江戸初期の検地により成立した村落に基づき、明治初期に制定された行政区画である。単一の集落あるいは複数の集落から構成されており、<sup>7</sup> 生存単位ならびに調査単位として妥当と考えたためである。大字領域に比定されるのは、古代地名 3986 中 1977 地名、およそ 50% であった。

### 3 立地傾向からみる〈千年村〉の特質

上記の手法により抽出した〈千年村〉の立地傾向を把握するために、地質図との照合を行った。それによると、ほとんどの地域が最も新しく形成された沖積層とその他のより古い時代の地層との境界近くに立地することが見られた(図3: 図中、青円が〈千年村〉を示す)。さらに、宮城県および千葉県を対象とした実地調査では、その多くが稲作・畑作を基本的な生業とし、現在でも生活と生産が持続していることを確認した。<sup>8</sup> これらのことから、本手法から抽出した〈千年村〉共通の立地傾向である地質の境界部とは、水源、水田・畑・里山・居住地など多様な土地利用を行うことができる環境であると推察できる。

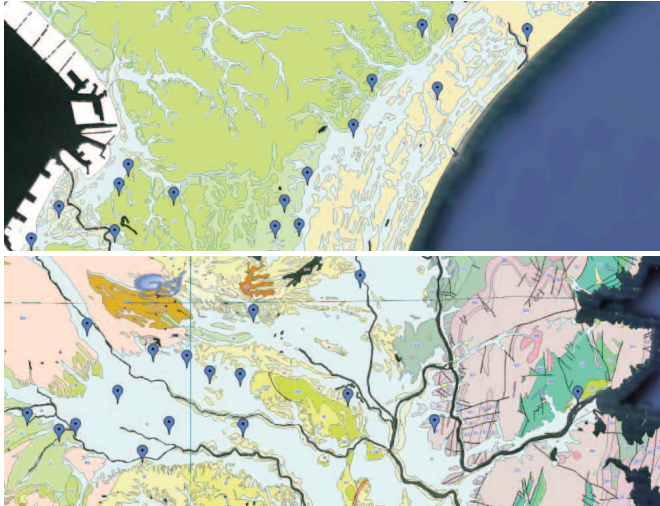


図3. 〈千年村〉の立地と地質との照合図  
(上) 千葉県九十九里浜付近／(下) 宮城県鳴瀬川付近

すなわち、千年を越えて人間が居住を続けてきた地域とは、生産と生活とを持続的に展開しうる地質・地形上の一定の特性を有する場所であり、それらが日本の国土の土地利用と景観の基層をなすものであることを強調したい。

### 4 まとめ

本報告では、〈古代地名の現在地比定〉の分析を通して、千年前に社会的集団が存在し、それが現在まで存続した可能性のある地域を抽出する手法を紹介した。その立地には異なる地質の境界部に位置するという共通性が見られた。これは国土における土地利用と景観の基層をなすものと考えられ、〈古代地名の現在地比定〉から抽出した〈千年村〉の特質になりうると考察した。

なお、本報告で紹介した手法は〈千年村〉を抽出する手法の一つにすぎない。『角川』において比定不可となった古代郷や『和名類聚抄』に記載されていない〈千年村〉をさらに探し出すことが今後の課題としてあげられる。

図版出典 1 『天理大学図書館『善本叢書と書之部第二巻和名類聚抄 / 三資類字集』(天理時報出版、1971) 2 筆者作成。3 〈千年村〉プロジェクトウェブサイト「『和名類聚抄』郷名から見つける」より。(mille-vill.org)

- 1 早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・博士(工学)
- 2 香川県総務部宮籍課 技師
- 3 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 修士課程

表1. 比定精度による現在比定地の類型(全国都府県毎の統計)

地域	都府県名	古代地名数	比定に関する記述の類型							録書中の記載部分未発見	大字に比定される地域ある地域内の古代地名(%)
			1	2	3	4	5	6	7		
			単一大字	複数大字	市域に比定	広範囲	比定に関する記述が異なる	未詳	比定に関する記述がない		
総数(ヶ所)	3986	886	1091	302	212	499	400	273	325	50	
割合(%)		22	27	8	5	13	10	7	8		
東北	岩手	18	3	0	1	1	0	7	1	5	17
	宮城	85	19	18	5	5	5	1	31	44	
	秋田	25	3	7	6	3	0	2	2	40	
	山形	40	7	12	10	3	0	2	1	5	
	福島	79	12	21	12	0	4	16	11	5	
関東	茨城	182	22	57	49	26	0	6	0	22	43
	栃木	30	12	5	0	0	7	0	1	5	57
	群馬	102	38	19	5	4	10	24	0	2	56
	埼玉	76	14	7	13	4	33	1	1	3	28
	千葉	179	31	58	0	0	39	28	3	20	50
	東京	36	4	3	1	0	11	9	1	7	19
	神奈川	82	16	25	5	0	23	8	4	1	50
中部	新潟	56	19	3	2	6	18	0	3	5	39
	山梨	31	4	8	9	0	10	0	0	0	39
	富山	42	7	9	0	1	3	21	0	1	38
	石川	56	15	9	7	14	6	4	0	1	43
	福井	74	30	3	3	16	6	11	0	5	45
	長野	67	36	11	1	1	9	1	2	6	70
	岐阜	144	38	30	19	5	15	10	20	7	47
	静岡	174	56	28	2	9	16	35	5	23	48
	愛知	137	40	25	8	2	46	5	1	10	47
近畿	三重	126	44	38	2	3	9	16	14	0	65
	滋賀	92	15	31	5	0	5	8	13	15	50
	京都	158	9	30	20	16	11	12	36	24	25
	大阪	148	9	94	4	0	29	0	4	8	70
	兵庫	233	41	87	35	12	14	14	15	15	55
	奈良	90	28	16	6	1	20	11	3	5	49
	和歌山	41	5	22	1	0	11	0	2	0	66
中国	鳥取	91	17	28	9	22	1	3	10	1	49
	島根	126	28	62	6	4	1	4	16	5	71
	岡山	188	78	67	3	4	10	7	6	13	77
	広島	127	25	32	7	4	20	19	5	15	45
四国	山口	85	18	29	4	0	29	3	0	2	55
	徳島	48	5	18	3	0	21	0	0	1	48
	香川	91	15	47	6	0	0	3	18	2	68
	愛媛	71	19	15	3	4	1	11	17	1	48
九州	高知	43	15	19	4	0	2	1	2	0	79
	福岡	183	38	26	8	13	9	31	23	35	35
	佐賀	39	14	1	0	3	1	9	6	5	38
	長崎	33	7	12	4	0	4	2	3	1	58
	熊本	98	9	35	3	0	30	18	2	1	45
	大分	60	10	7	1	15	0	17	7	3	28
九州	宮崎	27	1	6	5	5	4	3	3	0	26
	鹿児島	73	10	11	5	6	6	17	11	7	29

本稿並びに次稿、次々稿は、日本防災学会・文化庁委託研究「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及」(平成23・24年度)および早稲田大学特定課題研究助成(2013B-108)(平成25年度)による研究成果の一部である。

註1 詳細は、「千年村プロジェクト」ウェブサイト(mille-vill.org)を参照されたい。2 〈古代地名の現在地比定〉に関する分析は、第2稿にて行なう。3 醍醐天皇(885-930)。平安時代、第60代天皇。在位、897-930)の第四公主、勤子内親王の命により、源順(みなもとのしたのごう、911-983)が編纂した。自然界の事物から人間や住居・船などの工物、そして食物や植物などに関する名称の漢語を分類・項目立てし、先行する文献からの引用によって、その語に対する説明を記す。さらにその「和名」を仮名文字で示している。原本は、現在発見されておらず、写本によってのみ内容を確認することができる。十巻本と二十巻本の二つの系統が確認されており、二十巻本に古代地名が記載される。4 古代郷について、今津勝紀は、『和名抄』が編纂された平安時代、家族とその関係者など含めると1戸あたり約20人、50戸だと約1000人との説を提唱している。古代国家制度に関する先行研究では、「農業再生産可能な単位」「調庸のための単位」「徴兵のための単位」などの説が挙げられるが、決定的な見解は見えないため、ここでは上述のように記している。5 p25、坂本貴三「太田文から見た郡郷・別名制について(II)」『滋賀大学学芸学部紀要、人文科学・社会科学・教育学部(15)』(1965)。坂本の見解は、池田弥『和名類聚抄郷名考証』(吉川弘文館、1966)が『和名類聚抄』地名に関する研究を批判的に捉えたものである。6 『角川日本地名大辞典 別巻 日本地名資料集成』(角川書店、1990) 7 高橋大樹『千年村を起源とする町字の地形立地とその形態的特性について』(千葉大学大学院園芸学研究所 2013年度修士論文)において、千葉県(千年村)の町字の分析を行い、そこで展開される自然立地的な土地利用、町字形態毎の生活スタイル/開発パターンが存在を指摘している。それらを総括し、大字領域について居住域・生産地・共有地などを含む、その地域が長らく続けてきた土地利用を内包する一定の領域であると述べられている。8 千葉県(千年村)の全町字が、限界集落と重ならないことが指摘されている。「千葉県の千年村と限界集落の立地に関する比較研究」(高橋大樹; 梶尾智美; 木下剛; 池邊このみ、『平成25年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集』Vol.311, pp.32-33, 2013年)

- 1 Prof.School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.,Dr Eng.
- 2 Engineer, Building and Repairs division, Kagawa Prefecture.
- 3 Graduate student, School of Science and Engineering, Waseda Univ.